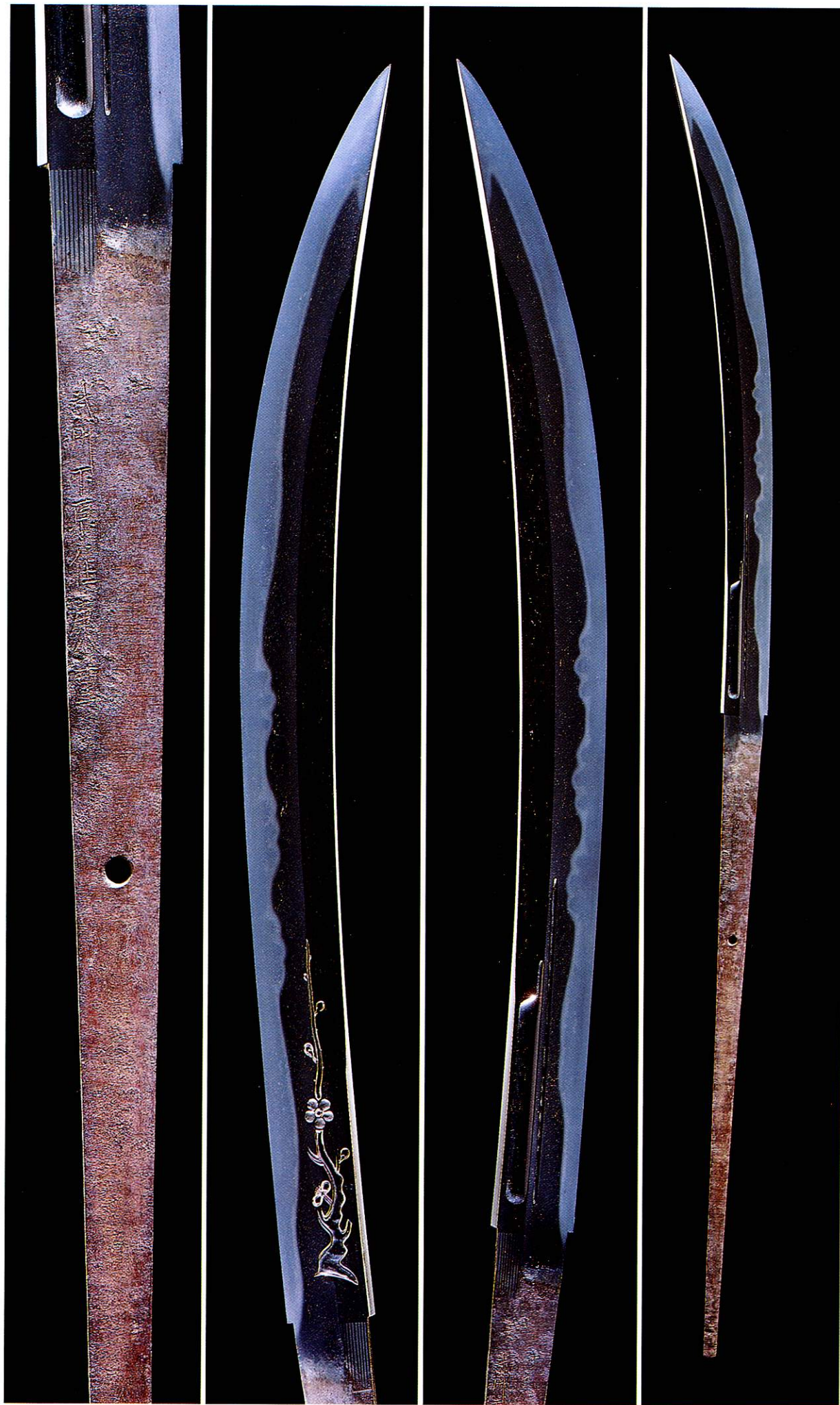


カラー図版



⑤ 薙刀 銘 武州下原住康重



⑦⑧ 金梨子地塗松竹梅菱紋蒔繪薙刀拵



薙刀 銘 武州下原住康重

安土桃山時代 天正

刃長 五〇・五釐（一尺六寸六分）。反り 一・九釐（二分六厘）

形状 薙刀造、庵棟、先張らずに鋒延びる。鍛 板目に杢交じり詰む。刃文 のたれの山に互の目が三つ並び繰り返し、物打ちのはたれに小互の目乱れる。帽子 乱れ込み小丸に返る。彫物 表に梅の木、裏に薙刀樋。茎 生ぶ、先栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに細鑿で端正な七字銘がある。銘字の「原」の二画が欠画になっている。

康重二代、与五郎銘である。この薙刀は、姿が美しく迫力あり、鍛え、刃文とも入念な注文打ちである。康重に通常みない欠画も珍しく、注文主との関係が考えられる。

（拵付）

〈拵〉

金梨子地塗松竹梅葵紋蒔絵薙刀拵

金梨子地塗に松竹梅と葵紋を金蒔絵にして散らし、総金具は銀磨地に唐草文を手彫にしている。

この薙刀拵は尾張徳川家伝来の品で、葵紋は、五木瓜の二重の外郭の内に尾張葵を納めたもので、陸奥梁川藩大久保家の紋である。梁川藩は尾張二代藩主光友の三男、出雲守義昌が、天和三年（一六八三）八月に、陸奥国伊達郡梁川に幕府から新地三万石を給与されて成立した藩である。義昌の子、義方を経て、その子義真は嗣子なく死去、本家尾張藩から三代綱誠の子、通春（のちの宗春）が入って再興したが、享保十五年（一七三〇）、まだ封地に赴かないうち、尾張藩第七代藩主に迎えられ、梁川藩は廃藩となる。

この拵には、二代康重の薙刀が納められ、松竹梅に家紋入り蒔絵は、当時における下原鍛冶の社会的な評価を示したものととして注目される作品である。